

病害虫発生予報 第4号（7月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

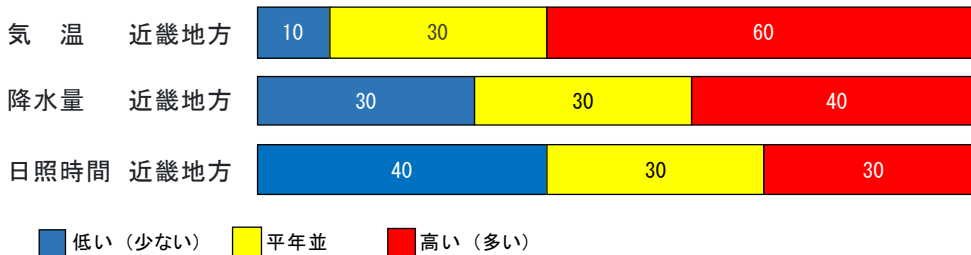
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病	並並 やや少	野菜全般	ミナミキイロアザミウマ	やや少 並 やや少
	紋枯病			ミカンキイロアザミウマ	
	縞葉枯病		カンキツ	黒点病	やや多 並 並 並 やや少 並
	ヒメトビウンカ			かいよう病	
ツマグロヨコバイ	ミカンハダニ				
セジロウンカ	ヤノネカイガラムシ				
ウリ科野菜	疫病	並並並多	カキ	チャノキイロアザミウマ	並並
	うどんこ病			ゴマダラカミキリ	
	つる枯病			炭疽病	
ナス科野菜	疫病	並	モモ	うどんこ病	やや多 やや多 少
				円星落葉病	
野菜全般	アブラムシ類	県北部 並 県中部 多 並	果樹全般	角斑落葉病	並 やや多
	ハダニ類			せん孔細菌病	
				カイガラムシ類	
				カメムシ類	少

気象予報

近畿地方 1か月予報（06/24～07/23）

2023年06月22日14時30分 大阪管区气象台 発表		
向こう1か月 06/24～07/23	天候	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
1週目 06/24～06/30	気温	1週目は、高い確率60%です。
2週目 07/01～07/07	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目 07/08～07/21	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）



I. 水 稲

1. いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%（平年0.8%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続くと発生しやすい。

② 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。

③ 常発地や罹病性品種（「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」等）の栽培ほ場では初発時期に注意し、発生がみられたら直ちに薬剤防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における前年9月上旬の発病株率は7.7%（平年15.5%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は0%（平年5%）であった。

③ 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市1.7%（平年5.8%）、かつらぎ町1.2%（平年6.9%）であった。

④ ヒメトビウンカの7月の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ヒメトビウンカの防除を行う。本虫の第2世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられる。前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は0頭（平年0.2頭）であった。

② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平年1.2頭）、上富田町0頭（平年0.4頭）、那智勝浦町0頭（平年1.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 育苗箱施薬剤を施用した6月田植えのほ場では、縞葉枯病の発生が認められる地域以外は7月の防除は必要ない。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は1.0頭（平成0.5頭）であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市64頭（平成5.5頭）、上富田町0頭（平成1.2頭）、那智勝浦町1頭（平成9.6頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 育苗箱施薬剤を施用した6月田植えのほ場では、7月の防除は必要ない。

6. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は0頭（平成0.4頭）であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成2.7頭）、上富田町1頭（平成3.6頭）、那智勝浦町12頭（平成9.8頭）であった。
- ③ 予察灯への初飛来は、那智勝浦町6月10日（平成6月4日）、上富田町6月11日（平成6月9日）であった。紀の川市（平成6月21日）では6月20日現在、飛来を認めていない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ツマグロヨコバイに準ずる。

7. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は0頭（平成0頭）であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成0頭）、上富田町0頭（平成0.3頭）、那智勝浦町0頭（平成0.4頭）であった。
- ③ 予察灯への初飛来は、紀の川市（平成7月13日）、上富田町（平成6月29日）、那智勝浦町（平成6月29日）とも6月20日現在、飛来を認めていない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生ほ場では、出穂前の防除に努める。本虫は株元に多く生息するので、薬剤が株元に届くように散布する。

8. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり被害葉数は0葉（平成0葉）であった。
- ② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による6月1～20日の誘殺数は0頭（平成0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代の発蛾最盛期は平成7月下旬頃である。防除適期は、粒剤の場

合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル等）の場合は第2世代幼虫発生時期（第1世代の発蛾最盛期の7日後）である。

- ② 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

※ 水稲害虫の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稲害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

Ⅱ．野 菜

<ウリ科野菜>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は6%（平成1%）、発病葉率0.1%（平成0.0%）であった。
- ③ 県北部の施設栽培キュウリにおける6月中旬の発生ほ場率は10%（平成28%）、発病葉率0.4%（3.3%）であった。
- ④ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

3. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率1%、発病葉率0.0%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率9%、発病葉率2.0%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては薬液が株元にも十分かかるように行う。

4. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は17%（平成30年：17%）、発病葉率1.1%（平成30年：0.3%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は83%（平成30年：13%）、発病葉率8.3%（平成30年：1.6%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病した茎葉や果実は、ほ場外に持ち出す。
- ② 降雨日が連続すると多発する可能性があるため、長雨が予想される場合は予防散布を実施する。
- ③ 令和5年度病害虫発生予察注意報第1号（令和5年6月20日発表）を参照する。

<ナス科野菜>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（過去9年の平均0%）であった。
- ② 県中部の露地栽培ミニトマトにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成30年：発生ほ場率4%、発病株率0.5%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨前の予防散布に努める。予防散布ができなかった場合は降雨後に早急に防除する。
- ② ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 県北部 並
県中部 多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の生息葉率は、モモアカアブラムシ3.4%（平成30年：0.1%）、ワタアブラムシ0.3%（平成30年：0.9%）であった。
- ② 県中部の露地および施設栽培スイカにおける6月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は88%（平成30年：74%）、生息葉率は17.5%（平成30年：7.4%）であった。
- ③ 黄色水盤（紀の川市）による6月1～20日の誘殺数は106頭（平成30年：110.5頭）であった。
- ④ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は、カンザワハダニ29%（平成31%）、ナミハダニ0%（平成7%）であった。
- ② 県中部の露地および施設栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は、カンザワハダニ53%（平成43%）、ナミハダニ6%（平成12%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率23%、生息葉率6.8%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率8%、生息葉率1.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地および施設栽培スイカにおける6月中旬の被害果率は0.2%（平成4.8%）であった。
- ② フェロモントラップによる6月1～20日の誘殺数は、紀の川市4頭（平成17.0頭）、御坊市18頭（平成51.5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
- ② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生ほ場率は25%（平年11%）、発病果率は2.1%（平年1.5%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、散布後の累積降水量が200～250mmとなった時点または1か月を経過した時点のどちらかの早いタイミングで次の散布を行う。
 - ② 過乾燥等で樹勢が衰弱すると伝染源の枯れ枝が増えるおそれがあるため、かん水等の栽培管理を適切に行う。

2. かいよう病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の春葉での発生ほ場率は18%（平年21%）、発病葉率は0.2%（平年0.8%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 罹病枝葉は果実への伝染源になるので剪除する。
 - ② ミカンハモグリガの食害痕は病原菌の侵入口となるため本害虫の防除を徹底する。
 - ③ 罹病性品種では強風雨前に銅水和剤の予防散布を徹底する（薬害軽減のための措置を講じる）。
 - ④ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生ほ場率は38%（平年33%）、発生葉率は12.9%（平年12.2%）、100葉あたり雌成虫数は38.8頭（平年42.2頭）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤を年間に2回以上使用しない。
 - ② 薬剤抵抗性対策として97%・98%マシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は薬害が発生しやすいうえ、7月中旬以降の散布は果実品質を低下させるおそれがあるので、散布は7月上旬までとする。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 6月下旬に防除できなかつた発生ほ場では、7月上旬に97%・98%マシン油乳剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）、寄生果率は0%（平年0.1%）であった。
- ② 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる6月1～20日の誘殺数は、由良町82頭（平年325頭）、有田川町29頭（過去9年の平均134頭）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生ほ場率は3%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 成虫の捕殺に努めるとともに、薬剤を散布する。
- ② 発生の多いほ場では、7月中旬以降に成虫の産卵防止および幼虫対象の防除として薬剤を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の発病新梢率は「富有」0%（平年0.0%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年0%）であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
- ② 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかる。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の発生ほ場率は「富有」38%（平年47%）、「平核無」・「刀根早生」24%（平年15%）であった。発病葉率は「富有」1.1%（平年2.4%）、「平核無」・「刀根早生」0.5%（平年0.5%）であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に散布する。
- ② 盛夏期には一時病勢は停滞するが、好適な気象条件やほ場条件で秋季まで二次伝染を繰り返すので、二次伝染の防止に努める。

3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は41%（平年38%）、発病葉率は6.1%（平年3.5%）であった。

- ② 県北部では感染時期である5月上旬から6月上旬にかけて降水量が平年並～かなり多く推移した。
- ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 子のう胞子飛散は、5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。
 - ② 薬剤防除は、5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

4. 角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は82%（平年65%）、発病葉率は13.9%（平年10.4%）であった。
 - ② 県北部では感染時期である5月上旬から6月上旬にかけて降水量が平年並～かなり多く推移した。
 - ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。
 - ② 薬剤防除は、円星落葉病に準ずる。

5. フジコナカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における6月中旬の発生ほ場率は「富有」0%（平年21%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年4%）であった。寄生果率は「富有」0%（平年1.1%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年0.1%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期である。
 - ② 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における近年の第2世代ふ化幼虫の初発は7月下旬頃であり、回目の防除適期は8月上旬頃と思われる。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における6月中旬の発病葉の発生ほ場率は90%（平年78%）であった。発病葉率は4.6%（平年5.4%）、発病果率は1.0%（平年5.4%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防風対策に取り組む。防風ネット、防風樹設置ほ場では保守点検を行う。
 - ② 翌年の伝染源軽減のため、秋季に無機銅水和剤を散布する。

2. カイガラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における6月中旬のカイガラムシ類（ウメシロカイガラムシ・ク

ワシロカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ)の寄生枝の発生ほ場率は10% (平年5%)、寄生枝率は0.8% (平年0.2%)であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期から1週間以内に薬剤散布を実施する。

② 県北部の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月7日前後、クワシロカイガラムシが7月9日前後と予想される。ナシマルカイガラムシは、7月21日～8月5日頃である。ほ場の主な発生種に合わせて薬剤散布を行う。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 紀の川市粉河の予察灯での6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが17頭(前年305頭、平年141頭)、ツヤアオカメムシが16頭(前年640頭、平年266頭)であった。

② 有田川町奥の予察灯での6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが2頭(前年33頭、過去8年の平均58頭)、ツヤアオカメムシが2頭(前年295頭、過去8年の平均146頭)であった。

③ みなべ町東本庄の予察灯での6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが121頭(前年300頭、平年381頭)、ツヤアオカメムシが302頭(前年3508頭、平年1295頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ほ場内への多飛来を確認したら早急に薬剤散布を行う。

② 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病害虫防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病害虫防除所の各担当までお願いします。

水稻、野菜、花き

本所(紀の川市、農業試験場内)

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在(有田川町、果樹試験場内)

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在(紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内)

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在(みなべ町、果樹試験場うめ研究所内)

TEL 0739-74-3780